

## 幼児の歌唱指導に必要な指導者の技術に関する考察

—幼児が無理なく歌える声域について—

久保田和子

### 1. はじめに

保育・幼児教育現場での子どもの音楽活動について、認定こども園教育・保育要領解説では表現・内容の解説の中で「園児が思いのままに歌ったり、簡単なリズム楽器を使って遊んだりしてその心地よさを十分に味わうことが、自分の気持ちを込めて表現する楽しさとなり、生活の中で音楽に親しむ態度を育てる。ここで大切なことは、正しい音程で歌うことや楽器を上手に演奏することではなく、園児自らが音や音楽で十分遊び、表現する楽しさを味わうことである。」（内閣府、幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説、2015、pp221）と、表現する楽しさを味わう事を歌唱の目的としている。にも係わらず、歌唱指導の現場によっては、どなり声での歌唱が行われている現状がある。しかし、どなり声での歌唱は、子どもの表現活動に繋がっていかないと考えられる。そのため、先行研究では声や声域について、これまでも多くの報告がなされており、その中で、子ども達のどなり声による歌唱について、論じられてきている。しかし、先行研究での提言を現場での歌唱指導に生きているとは言い難く、また、その結果を保育者がどう生かしているかという検証も見あたらないのが現状である。

そこで、入学前の音楽経験を起因として個々の技術に大きな差のある学生に対して、先行研究の提言が現場での歌唱指導に生かすために必要な、音楽的知識と技術とは何かを具体的にし、それらの習得の可能性を検討する必要性を感じた。そこで、今回は特に、「声質（どなり声）」及び「幼児にとって発声に無理のない声域」について先行研究を元に考察していくこととする。

### 2. どなり声についての先行研究

#### （1）細田順子、蟹江春香 2）

細田らの調査では、調査した埼玉県K市保育所保育者の82名中53名（65%）、同S市の幼稚園の保育者の40名中29名（73%）が自分の担当している子どもたちはどなって歌っており、半数以上の保育者が、子どもの声をどなり声と認識し

つつ歌わせ続けているという報告がされている。また、ビデオを使っての授業を通して、どなり声の例として提示した子どもの声を「どなっている」と認識せず、「元気な歌声」とであると肯定的に捉えた学生が想像以上に多かったことから、「幼児の歌唱指導のための発声」に関する授業の必要性を述べている。

また、喃（なん）語がことばらしきものによって変わっていく時期の乳児の歌声は非常に柔らかく静かな声であり、また、2、3歳になって一人で遊びながら歌っている声も非常に静かで柔らかいものであるといったことから、日本の子どもたちは、幼稚園などに入って集団で歌うようになってからどなることを覚えるようであると指摘している。

どなり声を避けたい理由について、どなって歌うと音程がきちんと取れない・友だちと声を合わせる楽しさを感じることができない・どなり声を出し続けていると嗶（さ）声（せい）になる・イメージを持って歌ったり、まわりの声や伴奏の音を聞きながら歌うことができない、と挙げており、どなり声では、幼児が歌を歌う本来の目的を果たすことができないので避けたい、とした上で、井戸<sup>3)</sup>が指摘するように、自然発生的に一部をどなって歌ったり、曲によって時には気持ちの高ぶりとともにどなったりすることまでやめさせようとするものでないとも述べてもいる。

どなって歌う理由については、日本の保育では、元気なことがいいことだ、元気なことは大きな声だという価値観が戦前から現在まで続いてきている背景があり、保育者が元気な大声を求めている・目立ちたいと思う子どもが力いっぱいどなって歌う・保育室が隣の部屋や園庭からの騒音で騒がしいことや、保育者の弾くピアノの音が騒がしいため自分の声が聞こえない為にどなる・歌の音域が子どもの声域に合っていないこともどなる要因になっていることを指摘し、子どもの歌の中には子どもの声域を超えている曲も多いので、選曲や調性にも注意が必要になるとも述べている。

この様なことから、幼児の歌唱における発声の指導について、保育士・幼稚園教諭の養成教育においては、学生に対して、保育者としての歌声の出し方「歌唱指導者自身の発声法」と、幼児に対してどのように歌唱指導したらよいのかという「幼児への発声指導法」という2つの異なった発声法を指導する必要があるのが分かる。

## （2）奥田順也<sup>4)</sup>

この先行研究は小学生を対象としたものであるが、保育園、幼稚園から小学校へと繋がっていく歌唱活動を扱っているため、その時点の子ども達の歌唱活動における問題点が、それ以前の幼児の問題点の解決に繋がっていると思われる。

小学校低学年の歌唱指導において、最初に直面するの可能性がある問題は「どな

り声」であることを指摘している。どなり声を解消するための歌唱指導法は二つの傾向があり、一つ目は、「移調等により地声では歌えない高い音で発音・歌唱を促すことで、頭声的発声に導くことをねらいとした指導」、二つ目は、「実態に合わせて子どもにとって歌いやすい調性に移調することで、無理なく素直な声での歌唱へ導く指導」であると述べている。

一つ目の指導法である「頭声的発声」は技術的な要素を求められるため、細かい指導によって子ども達の歌う意欲を削ぐことになりかねない。「頭声的発声」により子ども達の自己表現要求を抑える形になってしまわないよう、子どもが自己表現要求をコントロールできるようにする指導が重要になってくる。また、元々歌う意欲が十分でなかった場合、どなり声とともに表現する意欲も失う可能性があるため、頭声的発声へ指導法を転換するという方法で成果を出すためには、かなり高い指導力が求められることが考えられる。

二つ目の指導法である、「歌いやすい低い音域に移調することで、どなり声を解消するために無理なく素直な声での歌唱に導く指導」では、発声法そのものを指導するのではなく、必要に応じて歌いやすい音域に移調し、持ち前の声で声量をコントロールすることでどなり声を解消するものであるため、コントロールされた適切な声量での地声による歌唱活動を充実させることで、子どもが声を発する満足感を得て、自己表現要求を歌う意欲に繋げることも可能であり、また、声量をコントロールすることにより、結果として周りの音を聴くこともできるようになると考えられる。

この、「歌いやすい低い音域に移調することで、無理なく素直な声での歌唱に導く指導」、すなわち「適切な声量での地声による歌唱」が、どなり声の解決法に対する基本的な考え方であると結論付けている。

### (3) 森田百合子、山本金雄、山本敬、秋山衛 5)

幼児の発声器官は未発達な状態にあるため、大人の発声を適用することは出来ない。また、幼児の発声は、声帯に無理な力を入れない楽な声、素直な声が良いが、幼児は、歌っているうちに夢中になって、どなり声をあげることがある。そこで、幼児の歌唱指導では、美しい声で範唱して導いていくことも大切であるが、その前に、一緒に歌うことの喜び、歌を聴きあう態度を育てる努力をして、音楽する楽しみを位置づけることが不可欠であるため、頭ごなしに注意したりやめさせたり、大人の考える「美しい声」を強要したりして、幼児の表現活動そのものを妨げるようなことがあってはならないとしている。

また、声域については、幼児の心身の発達状態や音楽的経験、指導方法、さらに

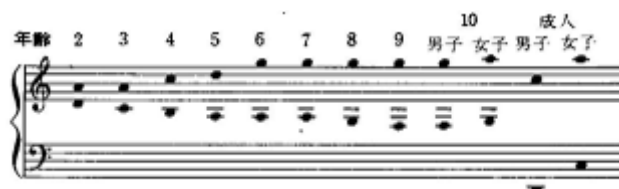
は幼児の表現の意図などによって影響を受けるため、一概には言えないが、一般的に幼児の声域は、1歳～2歳ごろは長3度（一点へ～一点イ）、3歳～5歳頃は3度から5度（一点ニ～一点イ）、6歳頃は5度～8度（一点ニ～二点ニ）と言われているとし、声域は教材選択の大事な一つの目安となるものであるから、これらを参考として、最終的には担当する幼児の実態に即応して、適切な教材を選ぶことが大切であると述べている。

### 3. 声域についての先行研究

#### (1) 斉藤繁6)

発達による声域の広がりについて、ジャーシルドとビンストックらは、各年齢で50%以上の被験者が正しく歌えた最高、最低音を譜例1のように示した（斉藤繁6))。楽譜例2の切替・沢島の研究も類似した結果を示している（斉藤繁6))と分析している。いずれの場合も、年齢がすすむにつれて、次第に声域がひろがっていくことが明らかであるが、これらの能力は個人差も大きく、経験の積み重ねによって、次第に聴覚的弁別力を高め、発声、聴音能力を増していくと論じている。

譜例1. 声域の発達（ジャーシルド、ビンストック 1934年）



注1) 斉藤繁 幼稚園教諭・保育養成課程用『幼児の音楽教育』音楽教育研究会 1997 p. 26の譜例1より転載

譜例2. 幼児の声域（切替一郎、沢島政行 1968年）



注2) 斉藤繁 幼稚園教諭・保育養成課程用『幼児の音楽教育』音楽教育研究会 1997 p. 26の譜例2より転載

(2) 武田道子、加藤明代 7)

乳・幼児は、言葉と歌との分離が未分化の状態から、だんだんに分離が始まるという過程にあり、はなし声自体に特有のふしがつけられて、歌として意識せず表現される事が多いため、幼児の声域を考える時、大人の範疇では処理できない問題があると指摘している。

調査対象は静岡県内公立私立保育園児93園、調査児童総数1274名。1歳児にとって望ましい教材は、一点ハ～一点ソの範囲の中で、短3度あるいは長3度の音高差でなだらかに動く旋律を持つ曲であるわらべ歌は格好の教材になる。2歳児の声域はロ・一点ハ～一点イの声域を目安に、短6度あるいは長6度くらいの音域の中で楽に歌える曲が良いとしている。年少児の声域については男女差は認められず、個人差が出てきていることから、声域は、歌声としてみた時に、イ～一点変ロ・一点ロ。音高感の芽生えが見られた事から、望ましい形での発声指導を加えながら声域を広げるという目的で、二点ハまたは二点嬰ハあたりまで視野に入れ、音域の中では、音高感が芽生えているという結果から、長6度を中心にオクターブ以内という範囲で歌える教材が良いとしている。年中児の声域は、女児が男児より広がっているという結果で、個人差が大きいことも配慮しながら、イ・変ロ～二点ハぐらいの音域の中での教材選択が考えられる。年長児はイ・変ロ～二点ハを中心か、それ以上を目安に、子どもの興味を刺激しながら「ゆっくりした落ち着いた曲」「リズムミカルな曲」等、様々な歌に出会うことで歌による表現を楽しむことのできる教材の用意が必要と述べている。

表1. 武田道子・加藤明代による声域調査 最高音

最高音 (%)	年長児		年中児		年少児		2歳児		1歳児	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
G <sup>1</sup> 以下	57.4	38.2	56.4	46.7	55.0	47.5	46.7	41.4	85.7	66.6
G <sup>*1</sup> ～A	23.8	27.9	25.2	25.2	19.0	20.2	23.3	31.0	14.3	16.7
B <sup>b1</sup> ～B <sup>1</sup>	12.3	24.5	10.6	18.1	10.8	15.8	20.0	17.2	0	16.7
C <sup>2</sup>	4.5	4.3	5.0	3.8	7.6	7.9	3.3	6.9	0	0
C <sup>*2</sup> 以上	2.0	5.1	2.8	6.2	7.6	8.6	6.7	3.5	0	0

注3) 武田道子 加藤明代 乳・幼児の歌唱能力の発達に関する考察 I 静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)第35号 2004 pp249 表1より転載

表2. 武田道子・加藤明代による声域調査 最低音

最低音 (%)	年長児		年中児		年少児		2歳児		1歳児	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
F* 以下	2.0	0.9	5.0	1.0	0	0.7	0	0	0	0
G・G*	18.4	13.7	14.7	10.5	10.1	9.4	0	3.4	0	0
A	23.0	17.6	17.0	13.3	22.2	10.1	13.3	6.9	0	0
B・B <sup>b</sup>	32.4	39.0	28.9	37.6	32.3	38.1	26.7	34.5	57.1	16.7
C <sup>1</sup> 以上	24.2	28.8	34.4	37.6	35.4	41.7	60.0	55.2	42.9	83.3

注4) 武田道子 加藤明代 乳・幼児の歌唱能力の発達に関する考察Ⅰ 静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)第35号 2004 pp250 表2より転載

以上は、集団を対象とした声域調査の場合、その集団の50%以上が出す事のできる上限音から下限音までの範囲を、その集団における声域と定義する場合が多いとし、水崎誠によるもっと高い割合にした方が良いという意見もあることから最高音を定め武田道子・加藤明代7))、考察を進めている。

(3) 鍛治礼子、小林直実、紫竹英恵、宮野モモ子8)の研究

声域は、会話の中で観察しても個人差が非常に大きく、歌う時の声域と関係しているかに疑問を持ったことから、幼児が自分から歌い出す時の音、歌う時の自然な声域はどのようなものを理解することで、集団での歌唱の際の指導へ生かしていけるのではないかとこの考えのもと、調査を行っている。

そして、声域に個人差の幅があり、声域の調査がすべての基準にはならないが、生理的な発達が、歌う行為を制約している部分があり、それが個人差にも表れているので、声域ばかりを考慮しては教材の選択肢が少なくなるので必ずしも優先的には考慮はしないが、教師は一人一人の子どもの発達の状態について認識しておく必要があると述べている。

4. 考察

(1) 声と声域に関する先行研究についての考察

まず、現場の半数以上の保育者が、子どもの声をどなり声と認識しつつ歌わせ続けているという調査結果について考察したい。

幼児が歌っているうちに興にのり、夢中になってどなり声をあげる姿は、要領、

指針の表現活動の目的に記載されている、「園児が思いのままに歌ったりしている状態」に他ならないが、その姿は、「楽しい」とか「注目されたい」といった自己表現欲求等のような「自分の気持ち」を込めて表現した形が、結果としてどなり声として現れた、という見方ができるであろう。その行為を、どなり声だからといって安易に阻止することは、状況によっては、「表現する楽しさ」を阻害するものとなる。表現したいという意欲が失われては意味がないため、自己表現欲求を抑える形になってしまう指導ではない方法をとる必要がある。このようなことから、現場の保育者は、そこにいる子ども達の状態を把握し、その上で、「どなり声のまま歌で表現する楽しさを味わうことを大切にしている」ことが、「子どもたちにどなり声のまま歌わせていた」理由として推測できる。

一方で、細田、蟹江<sup>2)</sup>は、どなり声の例として提示した子どもの声を「どなっている」と認識せず、「元気な歌声である」と肯定的に捉えた学生が想像以上に多かったと指摘している。これについては、学生たちが受けてきた幼少期からの歌唱指導に原因があると考えられる。戦前から続く、元気なことは大きな声だという価値観のもとで、養成校の学生たちも幼少期から教育されてきたため、1、2年後には保育者となる学生たちの価値観も、戦前のそれと変わってはいない場合もあるのが現状であるということの現れではないだろうか。この様な教育を受けてきた学生たちが、歌声、どなり声についての知識なく、保育者になっているのだとすれば、その保育者は「あえて、自己表現欲求を満たさせるために、どなり声を阻止せず、そのまま表現させることで、表現する楽しさを味わわせるという考えの下で、どなり声のまま歌わせている」というわけではなく、保育者自身が受けてきた、元気なことは大きな声だという価値観で、目の前にいる子どもたちに対し、元気な声＝どなり声のまま、歌わせ続けているということになる。

次に、子ども達がどなり声で歌いだすのは何時なのかを探っていきたい。奥田<sup>3)</sup>は小学校低学年の歌唱指導において、最初に直面する可能性が高い問題としてどなり声を指摘しており、小学校での合唱指導で経験豊富な蓮沼勇一<sup>9)</sup>も、入学したての一年生に幼稚園や保育園で歌ってきたように歌ってもらい、歌いたい気持ちをできるだけ削がずに、どなり声を修正してあげる必要があると説いていることから、どなり声は、小学校へ入学すると問題視されていることが分かる。細田順子、蟹江春香<sup>2)</sup>は、乳児の歌声は非常に柔らかく静かな声であり、また、2、3歳になって一人で遊びながら歌っている声も非常に静かで柔らかいものであることから、日本の子どもたちは、幼稚園などに入って集団で歌うようになってから、どなることを覚えるようであると指摘している。これらのことから、子ども達がどなり声で歌いだす時期は、保育園、幼稚園といった集団活動で過ごす時期からであるといえ

よう。

では、なぜどなり声を避けたいのかについてであるが、音程がきちんと取れない・イメージを持って歌ったり、まわりの声や伴奏の音を聞きながら歌うことができない・友だちと声を合わせる楽しさを感じることができない、といったように、幼児が本来歌を歌う目的を果たすことができないからであり、また、どなり声を出し続けていると嘔声になる等、柔らかい幼児の発声器官に損傷を起こしてはならないといった理由が挙げられる。

以上のことから、どなり声で歌うことを容認することで達成される表現は、歌唱活動の目的の中でも一部分であり、「表現する楽しさを味わう」歌唱は、自己表現欲求を満たすためのどなり声では決して表現できない。小・中学校、その先へと続いていく幼児の歌唱活動は、仲間の声を聴いたり、声を合わせるといったことから可能になってくる、表現する喜びを感じられる活動へと導いていく指導が必要であると考えられる。そして、その歌唱指導では、子どもたちへの声かけがとても重要になってくるが、言語の理解も未発達な幼児たちに誤解の無いように指導するには、経験と知識が必要となる。蓮沼9)は、「大きな声で、元気よく、口を大きく開けて、とは言いがちだが、子どもたちが勘違いするため、極力言わない。大切なのは、世の中には美しいものと汚いものがあることに気づかせ、どちらを選ぶか尋ねる。自分のうたごえを美しいか汚いか問いかける。」(蓮沼勇一、2013 p46～47)と、指導例を紹介しているが、歌唱指導に当たる保育者の幼児の歌声に対する感じ方に、音楽的にはどなり声とされる声を元気のあるいい声とする場合もあることは前述したが、そもそも、経験の少ない保育者の中には「幼児の歌唱でのいい声」について、価値観が定まっていないという可能性もあるのではないだろうか。

では、どの様な声が幼児の歌唱活動の声として相応しいのかを考えてみたい。幼児の歌唱でのいい声は、オペラ歌手のような歌声とも違うし、声帯が発達した大人が発するいい声とも違うということは、言うまでもないであろう。まず、発声について考えてみると、幼児が歌唱で出す歌声には地声的発声と頭声的発声とがあるが、地声的発声は話し声と変わらない発声法で、頭声的発声はいわゆる裏声であるが、頭声的発声は習得が難しく小学校でも中学年以降、もしくは高学年で指導されることが多い。また、幼児の声域は未発達で狭いため、中には頭声的発声をしなければ出せない音域を使っている曲もあるが、そのような声で歌わなければならない場面では、どなり声になり、無理に声を出そうとして、のどを痛めることにつながる。

これらのことから、無理なく出せる声、周りの音を聴くことができる声、幼児が声帯に無理な力を入れないで出せる声である、幼児の歌唱に相応しい声とは、「地声的発声（話し声の声域）で出せる声域の、やさしく素直な声である」としたい。



(2) 地声的発声(話し声の声域)で出せる声域についての考察

「表1. 武田道子、加藤明代による声域調査最高音」では、最高音が一点ト以下が、年長男児57.4%、年長女児38.2%、年中男児56.4%、年中女児46.7%、年少男児55.0%、年少女児47.5%、2歳男児46.7%、2歳女児41.4%、1歳男児85.7%、1歳女児66.6%と、全年齢男女の中で割合が一番多く、一点トより高い音になるにつれ割合が下がっており、一点嬰ト～一点イの割合は2歳女児が31.0%と他より高い数値を示しているほかは、20%台もしくは、それ以下を示していて、各年齢の1/4以下の割合になっている。最低音については、「表2. 武田道子、加藤明代による声域調査最低音」から、1歳児男女～年中児男女まで一点ハ以上の割合が一番高いが、年中女児に関してはロ・変ロが一点ハ以上と共に同じ割合になっている。年長児は男女共にロ・変ロの割合が一番多いことが分かる。これらのことから、幼児の多くは、頭声的発声が難しい発達段階にあるため、殆どの年齢の多くが示す最高音が一点ト以下となっており、他の多くの子どもの歌声についてを調査した先行調査で声域の上限とされている音は、頭声的発声の声域も含まれていると考えられる。

表3に、声域についての先行研究をまとめてみた。

表3. 声域についての先行研究一覧

研究者		1歳	2歳	3歳
ジャーシルド				
ビンストック	声域1		一点ニ～一点イ	一点ハ～一点イ
切替一郎	話し声			話し声 一点ホ
沢島政行	声域2			イ～一点イ
	音程	短3度～長3度	短6度～長6度	
武田道子	声域3	一点ハ～一点ト	ロ、一点ハ～一点イ	
加藤明代	最高音	一点ト以下		
	最低音	男ロ、女一点ハ		
森田百合子ら	音程	長3度	長3度	長3度
一般的な声域	声域4	一点ヘ～一点イ	一点ヘ～一点イ	一点ヘ～一点イ

		年少児		年中児
		3～4歳	4歳	4～5歳
ジャーシルド				
ビンストック	声域1		変ロ～二点ハ	
切替一郎	話し声		一点嬰ニ	
沢島政行	声域2		変ロ～二点ハ	
	音程	短7度～長7度		完全5度～長7度
武田道子	声域3	イ～一点変ロ		イ～二点ハ
加藤明代	最高音	一点ト以下		一点ト以下
	最低音	一点ハ		一点ハ
森田百合子ら	音程	3度～5度	3度～5度	3度～5度
一般的な声域	声域4	一点ニ～一点イ	一点ニ～一点イ	一点ニ～一点イ

		年長児		
		5歳	5～6歳	6歳
ジャーシルド				
ビンストック	声域1	変イ～二点ニ		変イ～二点ト
切替一郎	話し声	話し声 一点ニ		
沢島政行	声域2	イ～二点ハ		
	音程		長6度～短7度	
武田道子	声域3		イ～二点ハ	
加藤明代	最高音		一点ト以下	
	最低音		ロ、変ロ	
森田百合子ら	音程	3度～5度	3度～5度	5度～8度
一般的な声域	声域4	一点ニ～一点イ	一点ニ～一点イ	一点ニ～二点ニ

1歳児は、声域3では一点ハとなっており、最低音男ロ、女一点ハと、ほぼ同様なのに対し、声域4の一点ハは一般的な声域といわれるものと比べると、大分低い。また最高音は一点トで、声域4一点イと比べると2度低い。このことから、1歳児の歌の声域は一点ハ～一点トで、3度に収まる歌が相応しい。2歳児は最低音一点に対して声域2では一点ニ、声域3はロ・一点ハとなっており、声域4一点ハとは差がある。最高音については声域1、2、3ともに一点イであるので、2歳児の歌

の声域は一点ハ～一点トで、3～4度の音程に収まる歌が相応しい。3歳児、年少児は声域1及び最低音が一点ハで声域2と声域3がイになっており声域4では一点ニと高い音になっている。最高音は一点ト以下であるが、声域1、2、4が一点イで声域3も一点変ロと近い。3歳児にとって無理のない声域は一点ハ～一点イとしたい。4歳児の最低音は一点ハであるが、声域としてはイ、変ロ、一点ハ、一点ニと様々であり、最高音は一点トであるのに対し、その他の声域は一点イ、二点ハとなっている。3歳児と比較すると声域が下方にも上方にも広がってきていることが読み取れるが、やはり、無理のない声域を意識して、一点ハ～一点トの5度に収まる曲としたい。5歳児について、年長児も含まれるためか最低音が一点ハ～ロ・変ロと、ここで初めて下方へ数字的に広がりを見せた。声域1、2、3もイ、変イとなっている。最高音は一点ト以下であるが、声域は二点ハ、二点ニとなっている。しかし、声域4では一点イに留まっており、6歳で二点ニに広がっている。以上のことから、5歳児の無理のない声域はロ～一点イとし、音程は6度前後が望ましいと思われる。6歳児について、最低音はロ・変ロで、声域は変ロ～ロで声域4のみ一点ニに留まっている。最高音は一点ト以下で、声域は二点ハ、二点ニに広がっていて、音域も5度～8度までとかなり広い。6歳児にとって無理のない声域は、ロ～一点イで7度前後の音域に収まる歌が望ましい。

声域については、能力は個人差も大きく(斉藤繁6)、生理的な発達が歌う行為を制約している部分があり、それが個人差にも表れている(鍛冶礼子ら8)ことから、幼児の心身の発達状態や音楽的経験、指導方法さらには幼児の表現の意図などによって影響を受けるので一概には言えない(森田百合子、山本金雄、山本敬、秋山衛5)ため、集団を対象とした声域調査の場合、その集団の50%以上が出す事のできる上限音から下限音までの範囲を、その集団における声域と定義する場合は多い(武田道子、加藤明代7)、ジャーシルドとビンストックのものは、各年齢で50%以上の被験者が正しく歌えた最高、最低音を示しているとした(斉藤繁6)の研究や、もっと高い割合にした方がよいという水崎の意見に照らしながら最高音を定め(武田道子・加藤明代7))考察を進めている事を踏まえると、先行研究における声域調査の調査結果から最高音の示す値が50%前後を示している項目に注目することで、幼児にとって発声に無理のない声域(はなし声の声域)の音程が推測できると考えた。また、3歳児及び年少児以降は、先行調査の対象が年齢別ではなく学年別になっているものもあり、学年別はそこに在籍している両方の年齢を含むので、最低音、最高音を基準に、対象となる学年の両年齢を単一年齢での調査結果に合わせて比較していくことで、ここでは特に、「歌唱時に、幼児にとって発声に無理のない声域と音程について」を年齢別に検討したものが、下記、表4である

表4 幼児にとって発声に無理のない声域と音程

年齢	無理のない声域	無理のない音程
1歳児	一点ハ～一点ト	3度の音程
2歳児	一点ハ～一点ト	3～4度
3歳児	一点ハ～一点ト	5度
4歳児	一点ハ～一点ト～イ	5～6度
5歳児	ロ・変ロ～一点ト～イ	6度前後
6歳児	ロ～一点ト～イ	7度前後

## 6. おわりに

目立ちたいと思う子どもが力いっぱい歌う、保育者が元気な大声を求める、保育室が騒音で騒がしい、保育者の弾くピアノの音が騒がしいため自分の声が聞こえない、歌の音域が子どもの声域に合っていない、といったことが要因で、子ども達は、保育園、幼稚園といった集団活動で過ごす時期からどなり声で歌いだす。そして、幼児の声域は未発達で狭いため、どなり声になり、のどを痛めることになる。無理なく出せる声、周りの音を聴くことができる声、幼児が声帯に無理な力を入れないで出せる声とは、地声的発声で出せる声域の、やさしく素直な声である。その声域や音程がどの様なものであるかを明らかにすることで、実際に子どもたちの声域に無理のない曲とはどの様なものになるかを検討する足がかりに必要になると考え、「表4. 幼児にとって発声に無理のない声域と音程」にまとめた。ただし、実際には、幼児の声域には個人差があるため、その場にいる目の前の幼児集団の状況を判断して、調査結果と照らし合わせて選曲し、状況によっては移調したりといったことが望まれる。

また、実際の歌唱指導に繋げていくために、歌唱指導に必要な音楽的技術、知識についての検討するために、現場で実際に使用されている曲や、その音域、音程などの調査が必要である。そして、その結果と、今回得た、幼児にとって発声に無理のない声域と音程とを照らし合わせ、幼児の歌唱活動に相応しい曲について検討することで、保育者が歌唱指導時に必要とされる音楽技術についてを具体的に、「子どもにとって歌いやすい調性に移調することで、無理なく素直な声での歌唱へと導こうとする指導」の学生の習得の可能性等についてを考察していきたい。それらについては、現場の保育士を対象とした曲目に関するアンケート(既に調査済み)と、学生に対するこれまでの指導記録等を通して考察し、追って報告することとしたい。

引用文献

- 1) 『幼保連携型認定子ども園教育・保育要領解説』 内閣府 2016
- 2) 細田淳子、蟹江春香 保育者養成教育における発声法 東京家政大学研究紀要第50集(1) 2009 pp 31～39
- 3) 井戸和秀 幼児の歌唱におけるどなり声に関する一考察 保育学研究 第36巻第1号 1998 pp 44～51
- 4) 奥田順也 小学校低学年の歌唱指導における「どなり声」の解消法に関する考察—実践事例に見られる傾向について 芸術研究(玉川大学芸術学部研究紀要) 6 2014 pp 11～20
- 5) 森田百合子、山本金雄、山本敬、秋山衛『幼児の音楽教育 表現・音楽』 教育芸術社 2001 pp 8～9
- 6) 斉藤繁 幼稚園教諭・保母養成課程用『幼児の音楽教育』 音楽教育研究会 1997 pp 25～26
- 7) 武田道子 加藤明代 乳・幼児の歌唱能力の発達に関する考察 I 静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)第35号 2004 pp 247～258
- 8) 鍛冶礼子、小林直実、紫竹英恵、宮野モモ子 幼児への歌唱指導についての一考察—自分から歌う時の声域—千葉大学教育学部研究紀要 第54巻 2006 pp 63～68
- 9) 蓮沼勇一 怒鳴り声を、きれいな歌声にしたい時の言葉 『教育音楽』2013年5月号音楽之友社 2013 pp 46～47